活動と資料

『教員・学生交流型出席カード』を活用した学習支援の試み

伊丹君和、久留島美紀子
滋賀県立大学　人間看護学部

キーワード　教員・学生交流型出席カード、学習支援

Ⅰ．はじめに

近年、教育を取り巻く環境が日々変化する中、大学教員においても教育・研究能力を研鑽し向上することが求められており、各大学においてさまざまな取り組みが行われている。鹿児島大学では双方向授業のための学習連絡シートを使用し、学生の理解度や学習の進捗状況を把握するとともに複数教員での授業の場合に教員間の連携に役立てられている[1]。また、鳥取大学農学部においては毎回小試験を実施することにより授業内容の理解度や説明不足の把握ができ、学習効果の向上が認められている[2]。三重大学教育学部においても、毎授業の終了直前に授業に関する意見や感想を求める受講カードを導入し、学生との交流や授業改善に役立てている[3]。

そのような中、滋賀県立大学においても平成19年度より授業の双方向性を高めることによる教育効果の向上を図るためレスポンスペーパー方式が試行された。著者も平成18年度10月から、担当している１年生の生活行動看護論演習において、学生の理解度の把握や授業改善などを目的として「教員・学生交流型出席カード」を考案し導入している。今回はそのカードを用いた学習支援の試みについて述べる。

Ⅱ．対象および方法

1．「教員・学生交流型出席カード」の概要

2007年９月26日受付、2008年１月30日受理
連絡先：伊丹　君和
滋賀県立大学人間看護学部
住　所：彦根市八坂町2500
e-mail：k-itami@nurse.usp.ac.jp

導入した授業である生活行動看護論演習は、１年生前期から２年生前期の１年間を通じて行われており、看護の基礎を学ぶ上で土台となるものの一つともいえる。本演習では、卒業前に実施される看護師の国家試験も見据えて、重要となる知識をいかに確実に身につけることができるか、学生自らが技術を創造し習得していくための学習環境をいかに整えることができるか、学生の学習意欲をいかに高めることができるかなど、常に教育面で模索しながら試行錯誤を続けている。図１は、本演習での１場面である。

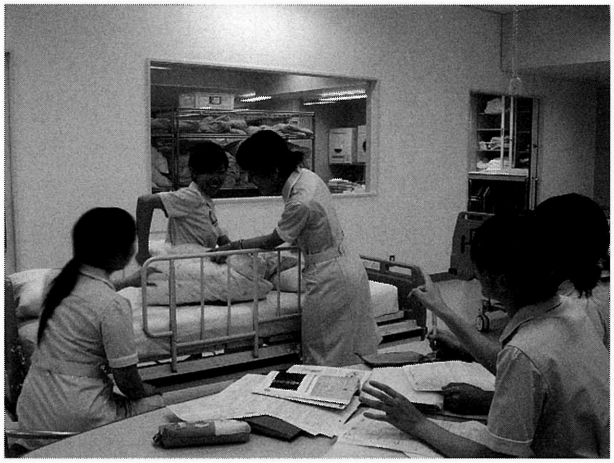
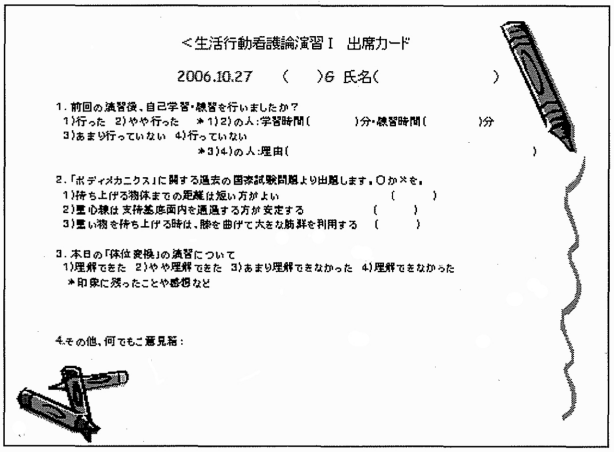


図１．生活行動看護論演習Ⅰでの１場面

「教員・学生交流型出席カード」の形式と記入にあたっては、可能な限り授業時間を有効に使うことができるよう必要最小限の内容に厳選し、用紙の大きさもＡ５版と最小にした。記入は各演習終了５分前に用紙を配布して３分間で実施することとし、記入後に回収した。なお、

用紙は記名式とした。また、返却後に学生が振り返って何度もみることができるようＡ５判のファイルを演習１回目に配布し、１年間継続してファイリングできるようにした。

内容は、三重大学教育学部織田らの「大福帳」を用いた授業実践報告も参考として、１）前回の演習後からの自己学習・練習時間とその理由、２）小テスト（前回の演習単元における過去の国家試験問題３問程度、○×式）、３）演習の理解度評定と感想、４）何でもご意見箱、とした（図２参照）。


＜生活行動看護論演習Ⅰ　出席カード

2006.10.27　（　　）G　氏名（　　）

1．前回の演習後、自己学習・練習を行いましたか？
1)行った　2)やや行った　＊1)2)の人：学習時間（　　）分・練習時間（　　）分
3)あまり行っていない　4)行っていない
＊3)4)の人：理由（　　）

2．「ボディメカニクスⅠ」に関する過去の国家試験問題より出題します。○か×を。
1)持ち上げる物体までの距離は短い方がよい　（　　）
2)重心線は支持基底面内を通過する方が安定する　（　　）
3)重い物を持ち上げる時は、腕を曲げて大きな筋群を利用する　（　　）

3．本日の「体位変換」の演習について
1)理解できた　2)やや理解できた　3)あまり理解できなかった　4)理解できなかった
＊印象に残ったことや感想など

4.その他、何でもご意見箱：

図２．「教員・学生交流型出席カード」の１例

なお、翌週の演習時には、教員が小テストを採点し、学生の記載内容に対してコメントを記入し返却することとした。このことによって、教員と学生との双方向の交流が紙面を通して可能となる。このほか、小テストに対して解説とともに解答し、必要時前回の授業内容に対する補足説明やアドバイスを全員に実施することとした。

２．対象と方法

「教員・学生交流型出席カード」を用いた学習支援の試みに対する学生の反応を把握するため、平成18年度後期の生活行動看護論演習Ⅰ（180分＊14回）を受講した１年生61名を対象として、最終の演習終了後に「教員・学生交流型出席カード」についての質問紙調査を実施した。分析は４段階評定および自由記載の質的分析とした。

３．倫理的配慮

質問紙調査の目的を伝えた後、参加の自由および匿名性の保持、個人評価に不利益がないことを口頭と書面で説明し、同意と協力を得た。

Ⅲ．研究結果

「教員・学生交流型出席カード」についての質問紙調査を実施した結果、60名の学生から協力を得た（回収率98.4%）。

「出席カードは演習する上で役立ったか」について４段階評定した結果、役立った、やや役立ったと回答した者が54名（94.7%）であった（図３）。「出席カードの中の小テストは学習意欲の向上に役立ったか」では、58名（96.7%）が役立った、やや役立ったと回答しており、「自己学習・練習時間の記入は学習意欲の向上に役立ったか」についても、54名（90.0%）が同様に役立った、やや役立ったと回答していた（図４、図５）。

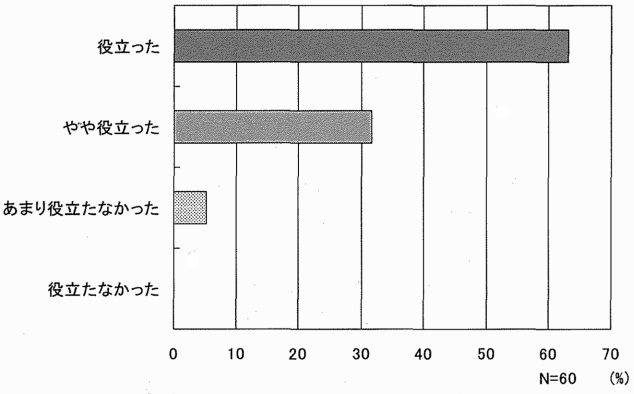


図3. 出席カードは演習する上で役立ったか

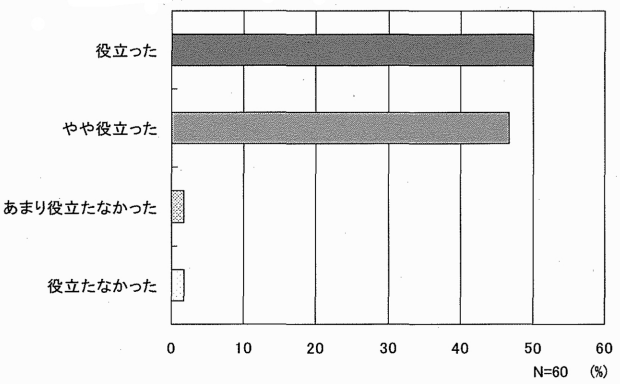


図4. 小テストは学習意欲の向上に役立ったか

また、通常授業期間での演習時間外の自己練習平均時間数は１人当たり14.0時間であり、出席カード導入前の昨年度の13.8時間と比較して高い傾向にあることが認められた。

一方、自由記載では、教員のコメントによって「嬉しい、がんばろうという気持ちにつながった」という『意

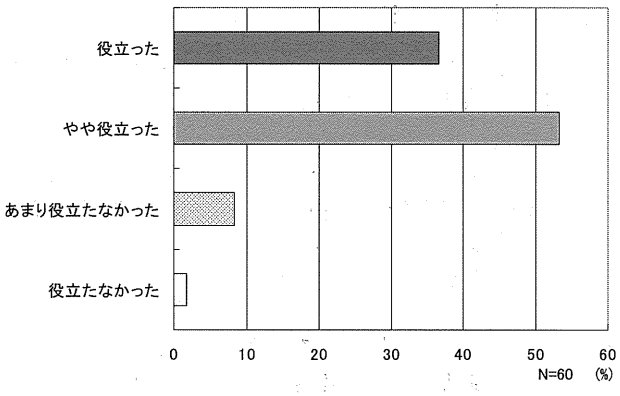


図5．自己学習・練習時間の記入は学習意欲の向上に役立ったか

欲の向上』を記した者が多くみられた。その他、「教員との対話やつながりが持てた」という『教員との関係向上』、「適切なアドバイス」による『演習内容の理解促進』、「質問や演習への要望に対して翌週には演習に反映してもらえた」という『演習内容充実効果』など5カテゴリーおよび8サブカテゴリーが抽出された（表1）。

表1．「教員・学生交流型出席カード」導入により学生が感じたこと

	カテゴリー	サブカテゴリー
Ⅰ	意欲の向上	教員のコメントによりやる気のアップ
		教員と学生との双方向の交流による嬉しさと次への意欲
Ⅱ	教員との関係向上	教員とのつながりの向上
Ⅲ	演習内容の理解促進	教員からのアドバイスによる理解促進
Ⅳ	演習内容の充実効果	学生からの意見による演習内容環境の改善
		学生の疑問点への教員のアドバイス
Ⅴ	考える機会	教員のアドバイスによる「考える機会」の増加
		課題の振り返りが可能

『意欲の向上』では、「毎回毎回先生がコメントしてくださるので、先生の授業に対する熱意がとても伝わってきて、私もがんばろうと思えました」「きちんとコメントしてくれていて、「こうしたらいいんだ」などと納得させられたり、やる気もでました」「コメントによって励まされたりほめられたりするのが嬉しくて、「次回も頑張ろう」という気になった」などの記載がみられていた。

また、『教員との関係向上』では、「先生とのつながりが持てた感じで、すごく良かったと思います」や「自分のコメントに対しての返事が励みとなったり、先生とのつながりが持てた気がして、毎回楽しみでした」などがみられており、『演習内容の理解促進』『演習内容充実効果』では、「アドバイスが次に生かせるものだった」「自分が疑問に思ったことや不明な点について答えてくれていて、さらにもっとこうしたらいいみたいな次につながることが書かれていた」や「意見もすぐに聞き入れ改善してもらえたのがとても驚きだった」などの意見がみられていた。

そのほか、『考える機会』では、「先生のコメントを読んで自分の書いたコメントをもう一度見直して、考え直したりできた」や「先生のアドバイスをもとに、考える機会が増えたし、やる気も起きました」などの記載がみられた。

なお、今回の調査では、学生のネガティブな反応はほとんどみられなかったが、1名の学生から「紙の上でのやりとりでは、自分の感想も先生のコメントも伝わりきっていない時があります」という意見が得られた。

Ⅳ．考　察

今回考案した「教員・学生交流型出席カード」は、1）前回の演習後からの自己学習・練習時間とその理由、2）小テスト（前回の演習単元における過去の国家試験問題3問程度、○×式）、3）演習の理解度評定と感想、4）何でもご意見箱、と記載内容は豊富であるが、紙面をA5版に抑え、記入時間も授業終了前の3分間と設定して導入した。このような「教員・学生交流型出席カード」に対して、94.7%の学生が「演習する上で役立った」と回答しており、学習支援への試みとして導入したカードに対する学生の評価は高いことが認められた。

また、小テストも毎回数問盛り込むこととしたが、同様な試みを行った鳥取大学においても授業内容の理解度や説明不足の把握ができ学習効果の向上が認められた[2]とあるように、今回、小テストも加えたことに対して、96.7%の学生が「出席カードの中の小テストは学習意欲の向上に役立った」と評価していた。このような小テストや自己学習時間の記入は学習意欲の向上につながり、自己練習時間数の延長からも示されたように学生の自己学習支援にもつながったと考える。

一方、自由記載においても、教員のコメントによって嬉しい、がんばろうという気持ちにつながったという『意欲の向上』を記した者が多くみられ、教員との対話やつながりが持てたという『教員との関係向上』、適切なアドバイスによる『演習内容の理解促進』、質問や演習への要望に対して翌週には演習に反映してもらえたという『演習内容充実効果』など5カテゴリーが抽出された。三重大学における『大福帳効果』[3]にもみられているように、教員から学生へ細やかなコメントが確実に毎週返却されるという方法は、学生への信頼を高め学習意欲の向上に貢献できる。

V．結　語

今回、人間看護学部１年生の生活行動看護論演習において、学生の理解度の把握や学習支援を目的として「教員・学生交流型出席カード」を考案し導入する試みを行った。そのことに対する学生の評価は高く、学生の意欲向上と自己学習支援にもつながったことを、質問紙調査および自己練習時間数などから確認することができた。

今後も引き続き、授業改善および学生の学習意欲の向上と自己学習支援に向けて、常にフィードバックを重ねながら努めていきたい。

参考文献・資料等

1）鹿児島大学HP『平成18年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築』http://kss.kuas.kagoshima-u.ac.jp/kyomu/18tokusyoku.pdf
2）鳥取大学HP『平成15年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」アウエアネスを持った学生づくり教育』http://www.tottori-u.ac.jp
3）織田揮準：大福帳による授業改善の試み、三重大学教育学部研究紀要第42巻、p165-174、1991.

A Trial of the Learning Support that Utilized the Response Cards between Teacher and Students

Kimiwa Itami, Mikiko Kurushima

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

Key Words response cards between teacher and students, learning support